

ローファンタジーをも
う1度！！

なっち様

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

超能力物をやりたかったです

目次

第1話

—

1

第2話

—

20

第1話

「暑いのと寒いのどっちが苦手ですか？」

横断歩道で信号が青になるのを待っていると

連れが苦しそうにそう言った。人混みに慣れていない彼女は東京の人混みを歩くと
いうだけでも大変なはずなのに、お喋りな彼女には黙っているという事の方が苦痛ら
しく、とりあえずの話題を降ってきたようだ。

「別にどっちが苦手とかは無い」

小学生の暇つぶし並のくだらない質問にも素直に答えてあげたのだが、彼女はムツと
し、

「そう言われたら会話終わっちゃうじゃないですか」

俺の答えを非難した。

なるほど、そう言われればそうかも知らんと思ひ、

「・・・強いて言うなら寒い方」

一応で答えてやると今度はお気に召したようで彼女はニカツと笑った。表情がよく
変わる奴だ。信号もこれくらい早く変わってくればいいのにな。

「へえーっ、私は寒いのは全然いいんですけど、暑いのは苦手なんですよね」
「見りや分かる」

彼女の髪は汗で額にピツタリとくっついていて、頬を伝う汗は一見すると彼女が泣いてるようにも見えるほどにだくだくと流れている、メイクが薄いのが少し跡がテカるくらいでそんな気にはならないが。

元がいいとメイクもそんなしなくてイイのかも、と彼女の容姿を再確認した。恥ずかしくなって辞めた。

「私って長野県出身なんで寒さにはめっぼう強いんですよ、でもその分暑いのがってあんま慣れてなくて。あつ、知ってますか？長野には軽井沢っていう有名な避暑地があつて1年の平均気温は8・2度でとつても涼しいんですよ！それに松本

「あー分かった、分かった！ほら、信号、青になったから！」

喋るのに夢中になって全然気づいていないようなので教えてやったのに彼女は不満顔で「まだあるのに」と言った。まだ、ねえ・・・それ信号がまだ青の内に終わる？

存外彼女は地元愛が強いようで、いつの間にか長野の話になつてるじゃねーか。暑いのと寒いのとどっちがって話聞いてきたのお前だろが。

信号が意味もなくカッコー、カッコーと鳴いていた。

「あー！また話終わらせた！どうしてくれるんですか！私こんな暑い中黙って歩くの無

理なんですけど！軍隊の行進かってんですよ！」

それ、暑くなかったらでできるみたいな言い方だな、おい

「もうすぐ着くから我慢しろって。ほら心頭滅却すれば火もまた涼しって言うだろ。それしろよ」

誰が言った言葉だか分からんがこの状況にドンピシャな使い方をできて少し悦に浸っていると、それが彼女には気に食わなかったらしくジトツとした目で俺を見た。なんだよ、悪いか？

「そんな誰もが知ってるような諺でドヤ顔しないで下さい。あ、ちなみに誰が言ったか分かります？」

いや知らんがな、今ちようど分からんって心中で説明したところだよと思ったが何も言わないというのも癪なので

「・・・千利休」

適当に答えてみたところ、彼女は俺を馬鹿にして、ほくそ笑んだ。・・・こいつがやればそれも可愛いものだからズルいと思う。

「千利休って・・・。千利休は安土桃山時代の茶人ですよ？こんな常識も知らないなんて馬鹿なんじゃないですか？」

「いや、俺だって違うとは思ってたよ？ただパツと浮かんだのが千利休だったただけだ。

それより、正解教えろよ」

あまり言及されるのも嫌だから答えを急かしてやったのだが彼女はまだ馬鹿にし足りないらしく

やれ「ここまでとは思わなかったです」だの「流石高校中退は違いますね」だのとグチグチ言ってきた。うるせー、エジソンだって学校行ってなかったんだぞ。

あんまりに言われるので恥ずかしいやら腹が立つやらで冷静な思考が無くなった俺は、通行人も忘れて

「くっ……殺せ!!!」

大声で女騎士になつてしまった。

やべえ、やらかした、と

思った時には遅く通行人がいつせいにこちらを見ていた。うわ、ほんとに死にてー。

だが効果はあつたようで彼女はドン引きしながらも

「……と、杜荀鶴です。晩唐の詩人ですよ」

と、引き撃つた顔で答えを教えてください。そもそも聞いたこともなかった。

逆になんでそんなの知ってるんだよこいつは、まだ俺が高校行ってたときそんなの教えてなかったよ、と思つたが聞いたらまた馬鹿にされそうなので辞めておいた。

閑話休題。いつの間にか目的地に着いていた。目的地と言っても普通のファミレスなんだけど、特徴を強いて言うなら子供に不思議と人気なマスコットが入口に置いてあるくらい。ただ飯食い来ただけでかなり疲れたな。

……ただファミレスくるのにも楽しじゃなかつただろ？ ナランチャ、と頭の中でホルマジオが1人静かに死んでいった。1人ジョジョネタをした後に、こんな事してるから俺は馬鹿なんだと1人反省した。おっと？ さては俺1人で何でもできるな？

「ええー！ー！もしかして外食ってファミレスの事だっただけですか!？」

1人最強説を唱えていると彼女から声が掛かった。

「え？？そうだけど？」

何か問題でもあるのだろうか？ こう…宗教的な理由とか、とかそういうアレで。俺も人と話す時に最初に「あつ」をつけなければならぬ厳しい戒律があるのでよく分かる。あつ、嘘です、あつはい。

「あのお、贅沢に外食をするって言うから着いてきたのにファミレスだなんて…聞いてないです」

え？ 外食する事って結構贅沢な事じゃ？ 外食だから贅沢だと思ってあんまりしない

*

*

*

のに、と自分と世間の価値感の違いに少なくないショックを受けたり受けなかったりした。

彼女はそれに気づいたようで慌てて、

「あ、え、えと。私勘違いしてて外食を、贅沢な物にするんだと思つてて、あの、その、日本語って難しいですね！それに私本当はファミレス行きたかつたんで嬉しいですよーいいファミレス！何食べよつかなー！」

彼女はわたわたと胸の前で手を横に振りながらフォローしてくれた。・・・してくれた、してくれただけだ。手動きと連動してゆさゆさ動くおっぱいを見るのに集中してて正直半分くらい聞いてなかった。嘘、全く聞いてなかった。壊れるほどでも三分の一も伝わらないんだから、そりや通常の状態もつと伝わるわけがないよね。

いいもん見たし、店入ろ。

《2名でお待ちの増田誠也様。お席が開きましたのでこちらにどうぞ》

店に入って40分くらい経つてから、やっと俺の名前が呼ばれた。店はクーラーが効いてたから苦ではなかったけど、逆にクーラー効いてなかったらブチギレてた。こいつは順番待ちの席が空くとサツと一人だけ座りやがるし、フルーツバスケットつて言つたら皆席替わつてくれたのかな

「あ、呼ばれましたよ！増田さん！思つてたより混んでたせいで待つちやいましたね。

というか順番表にフルネームって…」

「俺と同じ名字の奴がいたんだよ、区別するため」

「あ、なるほど」

行動の一々に理由を求めるとか名探偵さんかお前は。

「なら、私の名前書いとけばよかつたんじゃ？ 鈴科ゆかりって」

「あ、そうじゃん」

名探偵さんかよお!!おまえはあ!!

もうなんなの？俺が辞めてから学校は何を教えるようになったんだ!?それとも本当に俺が馬鹿なのか!?

……いやそれは無いか。今の学校が凄いなだな、うん

探偵学園Q並の生徒を育成してるに違いない

「増田さーん、どうしたんですか？ 店員さん待つてますよ？」

時間の流れについて考えていたら彼女…ゆかりから現実に戻された。確かに店員がカウンターの近くで待つててくれていた。お忙しいところ申し訳ありません、と心中で謝って店員について行った。

うわ、喫煙席かよ、ライターの忘れ物もあるし…

そうはいっても他に席はないのでしようがなく向かい合うように座るとゆかりはす

ぐにメニュー表を2つ取り、片方を渡してくれた。

「さて、決めちゃいましょう。へー、ファミレスって結構種類あるんですね」

ゆかりの言う通りメニューには定番のハンバーグからパスタ、グラタンの他に冒険心で商品開発されたのであろう餅スパゲティなるものまであった。絶対売れないなこれ。それよりもゆかりの発言が気になった、

「なあ、その言い方だと初めてファミレス来たってふうに取れるんだが」

「あれ、言ってませんでした？実は初めて来ました」

「いや、聞いてないな。てか凄いな、子供の時とかでも親に連れてって貰ったりしなかったのか？」

「子供の時はよくレストランに連れてってもらいました」

「レストラン？……ファミレスってレストランだよな？」

「いや、こういうチェーン店じゃなくて普通のレストランです」

ゆかりにとつてファミレスは普通じゃないらしい。

思わず普通について携帯で調べた。ありふれたも・・・の？そつと閉じた。

「なるほど」

頷いてみたが、果たして何に対してのなるほどなのかは俺にも分からなかった。

「なあ、お前の家って金持ち？」

それで父親は眠りの小五郎とかよばれてない？

「？、なんで、分かったんですか？」

「いや、まあ。会話の流れでそうなんだろうなああってなるじゃん？」

あと鈴科つてどこかで聞いたことある気がするんだよな

「そうですかね？増田さんは名探偵ですね」

「いや、それはお前だ」

「はい？」

「いや、こつちの話」

まあ、金持ちの生まれならファミレス行ったことないってのも納得。俺だって109とかスイパラ行ったことないし、それと一緒にだよな？うん一緒に、一緒に。敗北を知りたいぜ！

それにしてもこいつメニューめっちゃ見てるな、今までの会話中少しも目を離さないんだけど。なんか貧乏学生が一番安いメニュー探す時ぐらい凝視してるんだけど、いや構わないけどさ、金持ちの令嬢と貧乏学生が重なるってどうなの？

「結構悩んでるな」

なるべく急かしてるよう聴こえないように言つたつもりだったが彼女は慌てて

「もう少し！もう少しで決まりそうです！」

待つて欲しい旨をバンッとテーブルに伝えてきた。衝撃でコップの水が零れそうで怖い、頭文字Dでしか見た事のないような揺れ方してるし。

「ゆっくりでいいよ」

そう伝え俺は店の柱に備え付けられている大きなテレビを覗いた。そこではNHKのニュースが流れていて今の政治がどうか俳優がこうしたとか、全く興味の無い事が報じられていた。なんだよつまんねーな。

ちよつと見ていると緊急速報が流れてきた。

《東京都新宿区で放火事件が発生しました。》

ん？新宿ってここじゃん、さすが東京1治安の悪い区域だな。

《犯人は未だつかまっておらず『発火系能力者』であると考えられています。幸いに近くにあった『水力系能力者』によって火は消火され大事には至りませんでした。また犯人は未だ捕まっておりません。近隣住民の話によると黒いパーカーをきた20代くらいの不審な男性が事件直前に目撃されているそうです。今月にはいつて3回目の放火事件となりました》

ふーん、『能力』による犯行かー。最近増えてるなあ、つかいいいな、そういう使い易い能力持つてる奴は。俺のと交換して欲しいくらいだわ。使いづらくてしょうがないんだよな俺のは。

「今のゆかり聞いてたか？」

「あ！今決まりました！」

「……どうやらまだメニューを決めていたらしい。

「じゃなくて、新宿の、つまりここで放火だつてよ」

「へー犯人は捕まったんですか？」

「いや、まだ」

「早く捕まるといいですねー」

軽いなー、おまえの時計型麻醉銃の出番だよって話だつたんだけど。やっぱり推理パー

トないと使わない感じ？

「注文しちゃいますね」

「あ、うん」

ピンポンとお決まりの電子音が響いた。来たことないのに注文の仕方は分かるんだなつて思ったがよくよく考えたら彼女の『能力』のおかげだった。

鈴科ゆかりの能力ー視野強^{ハッ}窄^カは他人の視界を盗み見することができる。

この能力の嫌なところは盗み見される側は、それに気づけない所だ。本人いわく日常で使うなら超チート能力。おおかた、この能力を使ってどこかのテーブルの注文風景でも覗いたのだろう。

ちなみに、前に俺の視界を覗かれた時はちようどゆかりの胸を見て会話してたのがバレておもしろい殴られた。

「あ、増田さん、店員さん来ましたよ！」

ゆかりの言うとおりでさつき俺達を案内してくれた人が来た。

「チーズグラタナーつとコーンサラダーつ、飲み物はコーラで、増田さんはデミグラスハンバーグとポテトのＡメニユーですよね？」

どうやら俺の視界も覗いてたらしい、じゃあ俺呼ぶなよ。

「ああ、それぞれ」

了承の意を伝えると店員は復唱をして駆けぎみに帰って行つた。ふたたび静寂がふたりを包みこむ……こともなく赤ちゃんの泣き声とか学生の笑い声でライブハウス並だった。それでもゆかりは動じずにすましている、これが教養の差だろうか。

「お前、俺に能力使つただろ」

「使えるものを使って何が悪いんですか」

ほとんど悪役しか言わないセリフで開き直られた。少しも悪びれるつもりがない様だ。すかさず、

「気味が悪い」

上手いこと返せたので、ちよつと得意げにゆかりの顔を見てみた。

「すーぐドヤ顔するー」

からかわれたので辞めた。いじめっ子さんめ。

「増田さん、ちよつとこつち見て下さい」

「ん？」

言われた通りにするとゆかりもこつちを見ながら髪を弄り始めた。歩いて乱れたのをチエックしてるらしい。鏡見てやればいいのに

「あ、下向かないで下さい。ちゃんとこつち見て下さい」

「てめ、俺の視界を鏡代わりにしてやがったな！やめろつて」

「もう！ちよつとくらい、いーじやないですか、本当はそんな嫌じゃないんでしょお？」

「いや、そうだけどさー。なんか腹立つ」

「そーですか、私は腹が空きました。」

「すーぐドヤ顔するー」

「してませんー」

「俺の覗いてみ、どんな顔してるか教えてやる」

「スーパーウルトラ可愛い鈴科ゆかりちゃんが綺麗に写ってるに決まってまーす」

*

*

「この後どうするんですか?」

*

ファミレスを出てすぐにゆかりが尋ねる。

食べ盛りの遊び盛りの俺らにそのまま帰るという選択肢は当然ない。ゆかりもそのつもりだから聞いてきたのだろう。

「ゲーセンでも行くか?」

「ありよりのありです」

「お、さすがJK、流行りの言葉だった」

「・・・これもう廃れてますよ」

「嘘!」

数ヶ月前にCMで見たばっかだったはずなんだけど、そういえば（笑）を俺が使い始めた時も既に廃れてたな。そういえばwwwとか使ったことないな。

「増田さんって携帯のゲームは強いのに、他のゲームはそうでも無いですよね」

ゆかりは不思議そうに首をかしげるが、なんも不思議でなくただ学校行ってない分、人より携帯を弄る時間が長く、必然的に上手くなっただけだ。

俺は悲しい事実から目を逸らし、

「お前は音ゲーは何やらせても上手いよな」

話を自分からゆかりへと矛先を変えた。

「いやいや！私なんて下手ですよ！」

「出た、音ゲーマーの信用ならない自分下手アピール」

「ほんとですつてば！私より上手い人なんていっぱいいますよ！」

「そういう事ね」

何がそういう事なのか俺にも分からん（2度目）。

「いつもの所でいい？」

「はい！全然いいですよ！」

「場所的に歩きになるな」

「えー」

気持ちは分かるけどしようがないじゃん。

「ほら！行くぞ」

何がかんだいっても、俺が先に進むとちゃんと着いてくるのは分かっているので、さっ

さど行ってしまおう。

「待ってくださいよー！」

ほら来た、言われた通りに待ってやる。

「早く来いよー」

ちよつとその間に、目の前のビルのテレビ広告が目に入った。ヘルメット被ったおっさん達が鉄パイプで殴りあいボロボロになるが鉄パイプには傷ひとつ無いという演出で質の良さを広告していた。

く、クレイジー過ぎる。最後まで見終わると

『鈴科商店』という社名が流れた。おいおいおい!?

どつかで聞いたことあると思つたら、す、鈴科つてまさか!?

「あ、増田さん!あれ一家《ウチ》の会社ですよ!」

「まじかよ……」

『鈴科商店』——商店と聞くと小さな小売店を連想するが、侮るなかれその実、砂糖・製粉・製鋼からからはじまり、保険・海運・造船や銀行などを展開する日本で五本の指に入る大企業で、就活生なら誰もが入社したいと思わずにはいられない——会社だ。

「じゃあ、あのCMに写つてた人は社員つてことか?」

「チツチツチツ」

人差し指を左右に降つて否定された。俺のピツピだったら確定でだいはくはつを繰り出してるとこだ、ホントに何でだろ?」

「社員だけじゃなくてあのビルも一家《ウチ》の支社なのです！」

な、なんだってー!!!!とお決まりはさて置き、スゲーな鈴科商店、東京の渋谷にあるのを支店っていうんとかどんだけ金持ちなんだよ、普通本社だよ。

「どうです!?!凄いでしょ?」

ゆかりはふんつと興奮した様子で詰め寄ってくる。ふにん、と手に柔らかい感触があったたたあ!

ホントだ、凄い!

だが、あからさまに慌てるのは自分童貞ですとアピールしてるようで恥ずかしい、クールな俺は落ち着いて対処して、

「ちよつわ、ちかっちかちか、近いんだけど」

うん、落ち着いて対処した。

「はい?カチカチ山が近くなってる?」

「ちが、ちがくて!」

「冗談です、伝わりましたよ」

そう言うのとサツとゆかりは離れる。

確かに俺の体温はカチカチ山の狸と同じことになってると思う、顔が熱い。

・・・心なしかゆかりの顔も赤くなってるように見えた、夏の暑さのせいだろう、何

故だがそう思わないといけない気がした。

「お前がやったんだからな」

「……はい？」

「何でもない」

「……暑いですね」

「ああ……そうだな」

ヒット・アンド・アウェイな会話とも言えないようなものを繰り返した。こんな空気もゲーセンに着けばヒット・アンド・ウエイといった具合になるだろうと

足を動かす、遅れてゆかりもついて来……なかった

それに辺りも騒がしい。

「おい？どうした？」

「あそこ！燃えています！」

ゆかりが指を指す方向を見るとさつきまでいたファミレスから火が出ていた。いや、それは火なんていう優しいものじゃなくて炎そのものだった。

「な、どういう事だ!？」

ありえない、通常の火事はこんなに早く燃えない！

火はゆっくり、じっくりと全てを燃やし尽くしていくはず。それなのに、この炎は一

瞬でここまで燃え上がった。俺達が店を出てから十分と経ってないはず!?

あのファミレスだって藁の家という訳でもなかった。

「『能力』ですよ! じやなきや火の回りが早すぎます!」

答えは単純明快だった

第2話

ゆかりの言う通りこの火の回りの早さからして

まず、間違いなく能力による放火と見て間違いないだろう。狼の息吹となった炎はついに屋根を包み込み、店を藁の家のごとく燃やしている。俺達は店に急いで駆け寄る。

「ゆかり！ー！ー！ー！」

「もうしてますー！」

こんな時でもゆかりはしっかりしていて頼りになった。店の近くに着くとパチパチと火が弾ける音がして、ほんのりと熱かった。

「中に人は!?」

近くにいた人ー俺らを席に案内してくれたウェイトレスさんだったーに状況を尋ねる。3匹の子豚になってなければいいが……。

「誰もいません！ー瞬間移動能力者《テレポーター》のお客様がたまたま居たので助かりました」

この言葉を聞いてホッと俺とゆかりの間の緊張の糸が解けた。よかった、けが人がい

なくて。

残る問題は消火だが、こればかりは機材も能力者もない現状どうしようもないもので、大人しく消防車が着くのを待つしかない。

不幸中の幸いと言うべきか、ファミレスの隣は駐車場になっただけで燃え移ることも無さそうだった。

そうはいっても、どこか火が移ってしまった場所はないかと辺りを見ると、一人ニヤニヤと笑っている男と目が合った。

野次馬か？人の不幸を笑うなんて嫌な奴だな、たまにそういう奴はいるけどさ。火事と喧嘩は江戸の華らしい。全く以て不謹慎この上ないな。

それにしても、なんでこいつこんな暑い日なのに真っ黒のパーカーを着て、フードもずっぽり目が隠れるまで被っているの？

どう見ても怪しい奴じゃん、それに付け加えると

《黒いパーカーを着た20代くらいの不審な男性が事件直前に目撃されています》
さつきのニュースが思い浮かぶ。

・・・こんな事聞いた後だと、嫌でもこいつから目が離せなくなるわ。

こいつの服装とおよその年齢が報道された男と当てはまるのも怪しい要素だし。

それにこの火事はどう考えても『能力』によるもので、報道された『炎系能力者の犯

行』というピースも

こいつの仕業かは不確定だが、この事件に当てはまる。

様々な情報がこの男と連続放火の犯人が当てはまる。

あんなにゆかりの事を探偵、探偵と言っていた自分が

こんな事を考えてるといのは、少し、面白いなとは思った。消防だけじゃなく警察

も呼ぶべきだったかもな。でも、違ったら失礼かや（反語）

いや通報しよう。そう思いポケットの携帯を取り出すと携帯が突然発火した。

「んなっ!？」

「きゃあ!？」

咄嗟に携帯を放り投げた。

地面に叩きつけられた携帯は、ガシャン、とスクラップ決定を告げる。驚いているゆ

かりを尻目に、すぐさまパーカーの男を見ると、まだこつちを見ていて

さつきよりも深く――三日月のように――唇を歪めて笑っていた。

あいつの仕業か!!

あつちも俺が通報しようとしている事に気づいたのだろう。深淵を覗く時、深淵もま

たこちらを覗いてるとはよく言ったもんだ。

男はそのまま背を向けると野次馬達に紛れてしまった、おそらくこのまま逃げるつも

りだろう。

でも、悪いな、こつちにはゆかり視野強卒がいるんだよ！

「ゆかり！」

「増田さん!?! どういう事ですか?! いきなり携帯が燃えだして「すまん! 話は後だ!!」

「今すぐお前の能力で黒いパーカーの男を探してくれ! フード目元まで被ってる奴! こんな真夏にだ! すぐ見つかる格好だろ?!」

「え? 誰ですかそれ?」

「そいつがこの火事の犯人なんだよ」

「・・・すぐ探しますね」

「頼む!」

こういう時のゆかりの能力は監視カメラを数十個仕掛けてある様なものだ。更に火事を見に来た野次馬達でこの人ばかりだ、あの男もすぐ見つかるだろう。人混みに紛れるのは悪手なんだよ、ゆかりにはな。

あの野郎、地獄を見してやる。

「いた! 見つけました! 黒いパーカーでフード被ってる人はこの人しかいません!」

「はやいな、それで何処だ?」

あの野郎を俺の携帯と同じになるまでボコリまくると意気込んで、拳を硬く握った。

「お店の裏の路地ですけど、このまま視界を追跡しますか？」

「なに？そこにも誰かいるの？」

視界を追跡ということは誰かの視界である男を写すという事のはずだ。

「いえ、そのパーカーの男の視界を」

「え？できるの？」

「はい、私の能力は他人の視界に写った他人の視界を盗めます」

俺の連れはチートだった。

つまりインターネットで気になるリンクからまた次のリンクに飛び続けるネットサーフィンのように、人の視界を永遠に跳び続けられるという事だ。

その気になったゆかりから逃げられる奴なんていないんじゃないだろうか？

「じゃあ、頼む」

「犯人は今路地を右に曲がってます」

ゆかりさん黒パーカー男をついに犯人呼びしちやった。まあ俺の携帯燃やした犯人には違いないけど。

「いくぞ」

「は、はい！」

*

*

*

「そこを曲がった所にいます！」

ゆかりの指示通りに男を追いかけてきたが、鬼ごっこももう終わりのようだ。距離がまったく遠くならなかったということは、奴は歩いて移動していたのだろう、ゆかりも同じことを言っていたから間違いない。

ということは、追ってこないと思っているのか、今まで捕まらなかったせいで今回も、高を括っているのかもしれない。

または能力によつぽど自信があるか、だ

でも、それももう分かる。

曲がり角を抜けるとそこは雪国だった。

ということとは勿論無く、探し人が前を歩いていた。

さっきの奴に間違い無かった。

「殺す」

思いつきり俺の（元）携帯を奴の背中目掛けてぶん投げた。

投げた衝撃で元々バキバキに割れていた液晶が砕け飛び散りながら携帯が男の頭目

掛けて飛んでいく。

そのまま直撃！頭蓋骨粉碎！現世にバイバイ！ーとはいかなかった。

携帯があいつに当たる直前、突然現れた炎の塊に飲まれて吹っ飛んだ。

死体蹴りはやめてあげてよお！俺の携帯に恨みでもあるの？普通に躲せばいいじゃんか！

しかしながら、完璧に背後取ったと思ったのに何で気づかれたんだろうか。これも奴の能力？

とにかく、不意打ちは失敗した。つまりは正面切つて戦うことになった。

男はゆっくりとこちらに振り返った。

「お前みたいのが今まで居なかった訳じゃない」

男がパーカーを脱いで言った。

「は？」

意味が分からなかった。男は続けて

「お前みたいに俺を捕まえようとした奴がいなかった訳じゃないってことさ」

と言った。

「へー、それで？なんで捕まってるの？」

だいたい予想つくけどな、この後の展開も。

男は、僕は別に逃げるのが上手い訳じゃないと前置きし

「殺した。跡形も残さず、骨も残さず、燃やし尽くした」

と言った。どうやら連続放火魔は殺人鬼でもあったらしい。ここテストに出すよ。・・・俺、中退してたや。

「なんで、そんな事教えるんだ？」

一応聞いてやる事にした。男はこのセリフを待っていたようでニヤニヤと告げる。実に楽しそうだ。

「そりゃ、お前・・・。お前らも殺すからだよ。」

予想通りの殺害予告をされた。

「あの、本当に勝てますか？」

ゆかりは心配そうにしてるが、俺にはそんなものまったくなかった。確かにこの男は強いのだろう、実際に男の能力について分かっていないこともある、だけど

「大丈夫だ、俺のがもつと強い」

俺はそんな程度で負けない。

ゆかりとは長い付き合いなのだから、その辺はもう分かってほしいのだが。

「遺言はそれでよかったのかい？」

男がそう言うのと、轟！とオレンジ色の塊がそれ自体が爆弾となって俺を襲った、視界が染まる。炎が俺を覆い隠すように包んだ。

「増田さん!!!」

「あーあ、死んじやった。ま、あの火力なら一瞬だったんじやない？」

「だから俺は大丈夫だつて言つてんだろ、いちいち喚くな、ゆかり」

俺は炎の中心に立っていた。

いや、炎が俺を避けているのでその様に見えていた。

炎は俺を避け続け、俺が動く度にその炎が、まるで俺を煙たがるかのごとく割れる。

また上手いことを言っちゃまった。

「な、どういう事だ!」

男は驚愕の声をあげる。

「もちろん俺の能力だ」

「・・・お前の能力？」

優しい俺は教えてやることにした。

「俺の能力——三度目ラッキーカウントの正直——は2回連続して起きた事象とは反対の結果を出すオート発動能力だ。例えば2回連続で殴られたら3回目は必ず拳が俺に当たらなくなるし、石を2回投げて外したら3回目は絶対に当たるようになる」

これが俺の能力だ。これだけだと凄いが、それなら度々使いづらいとは言わない。この男には言わないだけでデメリットがある。

こいつのせいで人生狂いつぱなしだ。

例えばマークシートを使ったテスト、これはどんだけ勉強してもどれだけ分かってても3問に1問不正解になる、またはその逆、これのせいで俺は学校を辞めた。

例えば自転車、ペダルを2回以上漕げないから俺は自転車に乗れない。車もたぶんダメだろう。

例えば、例えば、あれもあれもあれもあれも!!!俺は出来ないし、出来なくなつた。

「おい!おかしいじゃないか!」

おっと、俺としたことが熱くなつてこいつのこと忘れてた。ちゃんと炎の効果出てるじゃん、やったね。

「何がおかしいんだ?お前の頭なら知ってるぞ」

「僕は1回しかお前に炎を浴びせてない!お前の説明だと1回目は能力の適応外だろ!!?なのになんで!」

俺が馬鹿にしたのを無視して男は問いかける。

確かに男の言う通り、俺の能力――3度目の正直は1回目と2回目は能力が発動しな

ラッキークォウン

い。だけど、少し抜け道があるのだ。

「教えてやるよ」

そう言つて俺はファミレスにあつたライターを見せた。」

そう、これがこの能力の抜け道なのだ。

俺の能力は1回目と2回目は偶然じゃなく自分で故意に引き起こした現象でも発動する。

今回は事前にライターで自分を2回焼いておいたという事だ。そうすれば奴の能力の炎で俺を焼くという現象が反転し俺を焼くことはなくなる。

ニユースを見てももしかしたらと思ひ拾つて置いたのが功を奏したな。

「なるほどな、ククツ、なるほどなるほど!!馬鹿だね君は馬鹿正直に敵に仕掛けを教えちゃつてさあ!!つまりもう僕の炎は防げないんだろ!!死ねえ!!」

男は叫びバランスボール程の炎を作り上げ、振りかぶつてきた。この大きさを避けるのはまず無理だろう。

「ま、効かないんだけどね」

炎は俺に当たる瞬間にバラバラと紙吹雪のように碎け散り、破片が地面に着く前に消えてしまった。

「何!?!」

動揺する男に俺はすかさず近づき腹に強く蹴りを入れた。内蔵まーざれ♪
「ごはッ！」

男は体をくの字に折り曲げて痛みによるめくが、間髪入れずに髪を掴みまた腹に膝を入れる。

「えぼお！」

膝を入れる。

「やだあ！」

膝を入れる。膝を入れる。膝を入れる。膝を入れる。

「お前さあ、俺がただお喋りしてただけだと本気で思ってたの？その間にまた能力発動するように調整するに決まってるんだろ。お前が俺の能力の説明聞いている時に俺はまた自分を2回焼いているんだよ」

うし、そろそろ離してやるか。髪をつかんでいた手を離すとサンドバッグ君となっていた男はドシヤッと崩れ落ちた。

「だいたいさあ、お前は勘違いしてるんだよな」

男は芋虫みたいにうごごしてるだけで返事はない。

あえてゆつくり追いかけてながら俺は男の勘違いを説明する。

「まず、お前を俺たちが本当に捕まえる気だったんなら普通は警察に連絡するだろ。俺

の携帯は確かにお前が壊したけど、ゆかりの携帯はあったんだから警察に連絡して、お前と闘うことなく放っておけばそれで良かったんだし」

ごく当然の事なのに気づかなかったのだろうか？

「それに、最初の増田さんの能力が発動した時に本当ならもう今の状況まで持つて行けたんですよ？能力を教えたがるの増田さんの悪い癖です」

ゆかりが俺の言う事を奪ってしまった。

「いいじゃんかよ、能力を教えた上でボコすのが圧倒的な感じがして気持ちいいんだよ」漫画の敵や主人公がわざわざ能力を相手に教えるのはたぶんこの無敵感を楽しむためにしているに違いない。自分の能力はチートなんだと思わせてくれる。

「ま、最初からお前はこうやって俺にボコるために追いかけてたわけよ。いうなれば俺らの娯楽か？」

そして遂に男に追いついた。

「追いかけてっことは終わりですね。最後は私が貰う約束なんです」

ゆかりはいつも自分にボコられる奴の視界を盗む、自分の攻撃をやられる側で見るのが好きなのだそうだ。

「はい、じゃあお目目開いてくださーい」

ボゴオ!!!

鈍い音が響いた。